巻頭言

ディズニーランドと経済学

私の専門は経済予測や計量経済学なので、観光とはあまり関係のない仕事をしてきた。その中で接点といえるのが、「ディズニーランド」だ。ディズニーランドをテーマに様々な活動をしている。東北地方を中心に、北海道から神奈川県まで計16の高校でディズニーランドと経済学をテーマに模擬授業をした。オープンキャンパスでも毎年模擬授業をしている。プロゼミではディズニーランドをテーマにレポート、プレゼンの指導をしているし、「ディズニーランド研究会」というブログも運営している。

「ディズニー」は研究対象として非常に魅力的だ。ディズニーランドを作ったウオルト・ディズニーは、成功した起業家として分析することができる。映画の歴史、アニメーションの歴史、テレビジョンの歴史にディズニー社は欠かせない。キャラクターの変遷は女性の社会的役割の変化を反映している。アナハイムのオリジナル・ディズニーランド、フロリダのディズニー・ワールド、パリや香港のディズニーランドなど、国際的な視点からの比較もできる。東京ディズニーランドは、失われた20年の間も入場者数を増やし、リーマン・ショック、東日本大震災を経験した後も株価は過去最高水準で推移している。優れたサービスについてもよく話題になり、企業としての魅力も持つ。

ディズニーランドと経済学の関係をよく考えるが、この二つの関係は意外と難しい。ディズニーランド関連書籍は枚挙に暇がないが、経済関連では粟田房穂と高成田享が著した『ディズニーランドの経済学』（朝日文庫）が著名である。朝日新聞の記者が書いた非常に面白い本だが、厳密に経済学を適用しているわけではない。ディズニーランド開園時の社会分析が内容である。

そもそも「経済学」の定義は多様だ。経済の語源は経世済民すなわち「世を經（おさ）め、民を濟（すく）う」だ。隋の時代の王通『文中子中説』礼楽篇が出典の一つだ。この本は論語を模したもので、為政者側からの学問のにおいがする。一方、economy はギリシャ語の oikonomia が語源で、家計の管理法という意味である。いずれにせよ、企業が研究対象の経営学ならまだしも、ディズニーランドとは結び付けにくい。

マルクス経済学では、下部構造である経済活動が上部構造である社会や政治を規定すると考え、歴史は資本主義から共産主義へと変遷していくと主張する。こうした考え方はディズニーランドのコンセプトから遠く離れている。

しかし、最近「経済学」はかなり広い意味で使われている。最適化、費用便益分析、パレート効率性などの手法が経済学独自の分析手法で、それらを適用すれば経済学的分析となる。逆にいえば研究対象は何でもよい。シカゴ大学のスティーヴン・D・レヴィットの著作『ヤバい経済学』（東洋経済新報社）では、麻薬、子供の名前、大相撲の八百長などが題材になっている。「労働経済学」、「文化経済学」、「環境経済学」、「観光経済学」、「結婚の経済学」など何でも経済学になる。ディズニーランドの経済学もこうした考え方の延長なら成り立ちそうだ。

経済学は合理性を仮定し、効率的なものを追い求める血も涙もない学問だと思っている人も多い。しかし、最近の経済学者の関心は、むしろその前提が満たされない場合の研究に移っている。人間が合理的に行動しないことがわかってきたため、心理学を採り入れた行動経済学が盛んだ。感情の分析などが重要で、ディズニーランド分析との親和性も高そうだ。

山　澤　成　康
（マネジメント学部学部長）